

2015年1月6日

## 第37回国際協力セミナー 議事録

講師：瀬谷ルミ子氏

先ほど簡単に私の経歴について紹介をいただきましたが、キャリアのほうにできる限り重点を置いてほしいという依頼なので、どんな仕事をしてきたか、それを自分の仕事にするに至るプロセスについてお話したいと思います。

### ● 現場での活動を通して気づいた、国際協力における民間企業の役割

現在、2つの肩書きを持っている。

1つはJCCPというNPOの理事長。

もう1つ、JCCPMという株式会社の取締役もやり始めた。

JCCPMは、主にアフリカ地域を中心とする、途上国に進出する企業へのコンサルティング役としての活動をしている。これは、民間企業ができることは早い段階で民間企業に担わせる仕組みが必要だということを、現場での活動を通して知ったためにはじめた活動である。紛争が起こると国際機関やNGOなどの支援団体が来るが、ある程度まで立ち直っていくと、みんな去っていく。そのときに自立できていないと、貧困に逆戻りしてしまう。日本企業が利益を生み、現地での雇用を生む双方にとって利益を生む事業である。

国際協力の現場には、国際機関、NGOなど様々なアクターが関わっているが、自分たちだけで完結した活動をしてしまうことが多く、もったいないと感じていた。最近では民間企業の人が入るようになってきている。経理の人、広告や宣伝の人などが活躍している。日本で職業として成り立っている技術や産業が必要のない国なんてほとんどない。組織垣根を越えて協力し合っていくべき。

### ● どうやって平和構築や紛争に関わるキャリアを築いてきたか

20代の前半から、20代のうちはずっと元兵士の社会復帰、武装解除を専門としてきた。武器を回収、軍隊から除隊した上で、軍隊以外の生き方を教育する。紛争が終わった後、一般の人は喜ぶが、困る人もいる。兵士は明日から仕事なくなる。明日から自分たちはどうなるのか。手元には銃がある、どこかの店を襲おうと考えてしまう。そういう人たちが平和な社会の中で役割を見つけられるように、職業訓練をする。子供の場合は学校に戻したり、元の家に戻したり、元の家に戻れない場合には里子に出したり。

自分は国際的な家庭環境で生まれ育ったわけではない。桐生市、子供のころは村で、熊が出るようなところ。自分以外はパスポートも持ったことのないような家族。では、なぜこのようなキャリアを選ぶにいったか。

自分にはそんなに取り柄がない、人と違うことをしないと世の中から必要とされない。だから、ニーズがあるけどやる人のいない仕事をしよう、と常に考えて行動してきた。その結果、自分のやりたい仕事ができている。

武装解除の専門家は、紛争解決の分野でもマイノリティであるが、なぜこの分野を選んだか。紛争解決の仕事をしようとして、イギリスの大学院にいったら、学科には日本人 15 人、全員で 60 人もいた。この中で勝つために、紛争解決の仕事の中でも、専門化がいなくて苦労している分野を選んだ結果、武装解除に行き着いた。

小さいころから、劣等感をばねにして生きていた。国際協力の分野を専門にしたいけど、なにを専門にしたいのかわからないという質問を受けることが多いが、どんな分野でも掘り下げていけば現場にニーズがある。人から言われて興味のない分野を選ぶより、自分の興味のあることで努力すべき。

この分野に興味を持ったのは高校 3 年生のとき。小さい頃から、自分は人と比べて優秀な訳ではないから、人がやっていないことをやろうという焦りがあった。それが当時の自分にとっては英語だった。小学生のころ、周りがやってないからと英語をがんばり、中学校ではトップクラスの成績だったが、高校に入って英語一辺倒だと帰国子女に負ける、プラスアルファが必要だと気づいた。

そんなときにルワンダの写真を見た。難民キャンプの写真。屋根もないところに人が流入し、コレラにかかって意識を失う母親を泣きながら起こそうとする子供。英語は好きだけど、通訳では帰国子女に勝てない。この仕事なら英語プラスアルファが必要になる。ちょうど進路に悩んでいたときにルワンダの事例があり、これを仕事にしようと思った。

進学する学部を決めようと思って調べたが、当時は紛争解決について教える学部がなかった。そこで普通はあきらめるけど、自分はチャンスだと思った。ニーズがないところは職業にできないけど、これだけニーズがあるのに専門家がいないというのはチャンスだと思った。大学 3 年生のとき、元兵士や子供兵の社会復帰が問題になっている、という文章を見て、さらに専門分野を絞った。

高校 3 年生のときに紛争解決に興味を持ってから、専門的に学べる学部がなかったことから、広く学べる中央大学へ進学した。ネイティブが多いところに顔を出し、語学は勉強した。20 歳の春に、ルワンダに一人で行ってみた。というのも、紛争のことを学べる本は日本語にはなく、英語でも古い本しかなかった。現状を見たいという思いと、他の人がやらないうちにこの分野のスキルを身につけなければ、という焦りで、現場に行った。どうやってルワンダにいったかというと、日比谷公園とかでやっている国際交流イベントでボランティアとして参加し、ルワンダのことをして散る人はいないかと聞きまくった。そこで見つけた人に、1 ヶ月くらい泊まらせてあげられるルワンダ人家庭を紹介してもらった。そのときは、現地に行ったら自分には何か出来ると思っていた。ルワンダのことを勉強し、

英語だって勉強した、外部の私だからこそ心を開けるものがあるのではないか。でも、現地に行ったら役立たずだと痛感した。英語ができるといっても現地では英語フランス語に加えて現地語はキニアルワンダ語だし、ルワンダのことはルワンダ人のほうが知っている。それに、なにかしたいだけでは現地のことを傷つけてしまうこともある。自分が現地の人に虐殺のことを話してくれと聞いても、興味本位なんだろうと思う人もいる。外部の中立的な人間だからと話してくれる人もいるが、3人以外、家族親戚皆殺しにされた、という話を聞いても、自分にはただ聞くことしかできない。現場で何かするにはそのためのスキルを身につけなければならないということを痛感して帰った。帰国後、ルワンダに関わる活動をしている NGO でインターンをして、日本で身につけられるスキルはすべて見につけようとした。インターンをはじめた当初はコピー1つとれず、現地で何か専門家になるためには事務的なことは片手でこなす必要があるが、それすらも圧倒的に足りないと感じた。自分本位で、現地の人に何か貢献できるという思い上がった気持ちがあったことに気づけた、というのが大学3年生での大きな発見だった。

その後イギリスの大学院に行った。武装解除を専門にしようとして願書を書いて通ったのに、それを専門として指導できる人はいなかった。普通だとはっきりするところかもしれないが、ますます思いを強くした。イギリスの大学院に行った理由は、1年で修士が取れるから。それだけ、人よりはやく現場に出て、スキルを身につけたいと思った。大学院を卒業して、ちょうどインターンしていた NGO がルワンダに事務所を開くというので、ルワンダで働き始めた。

## ● 国際協力の現場で求められている人の条件

自分がどういうことをやりたいか、専門家とかに会うたびに、鬱陶しく思われぬ程度に積極的にアピールすることをおすすめしたい。学生時代に話を聴きに行った研究者に自分の書いた文章を載せてもらうとか、やりたいことを伝えると応えてくれることは多い。専門家は同じような現場を転々としているため、声がかかる。自分からアプラインして面接をして、という風に得た仕事はほとんどなく、紹介でどんどん仕事を得られた。その現場で働いた成果を間近で見ている人たちとよいチームを築くことが、その現場での成果だけではなく、自分の将来の基盤を築く上でも大事。

国際協力の現場では、国連、政府、JICA、開発コンサルタントなど、組織を行き来する人が多い。またこの人とやりたいなと思わせる人間は、役職は関係ない。ある組織でしか活躍できない人は、自分のチームに引っ張ってこようと思わない。難しい現場ほど、柔軟性のある人でないとチームに入れられない。相手の立場を踏まえた関係を築こうとすることが重要。現場では、同じ目的を目指しているのに、資金の取り合いとかくだらないプライドで対立することがある。自分はずっと同じ組織でやっていくんだ、と考えている場合は

別だが、自分の立場をわかった上で協力してくれる、と相手に思わせる人がますます複雑化していく社会で求められると思う。

### ● ニーズがあるけれど担い手のいない現場で、現地の人だけで回る仕組みを構築するという活動ポリシーの徹底

代表を務めている NPO、JCCP について、現場の活動の事例とともに、ポリシーを紹介する。ニーズがあるけれども担い手がいない地域を選んで活動するようにしている。ソマリアとか、外務省的には法人は撤退するようという韓国がありながら、例外的に現地への出張が認められている。

主に 4 つの分野で活動。

一つ目に治安の改善。現地を安全にするという分野で活動する団体はすごく少ない。紛争が終わった跡に難民への人道支援を行う団体は多いが、その後また紛争が再び起きないようにするために、警察がいない地域でどうコントロールするか。たとえばソマリア・ケニアでの警察の訓練。何を教えるか。公務員がきちんと給料が払われていないくらいに財政が破綻しているため、犯罪加害者になる。警察を訓練しても、住民が警察に行かない。住民と警察との間の信頼醸成や、住民たちで警察の機能を担ってもらう。言い争いが暴力に発展する前に防ぐノウハウ。

2 つ目、衣食住の確保。平和について考える前には、まず最低限の生活が必要。他の機関がやっていることが多いため、あまりやっていない。

3 つ目が自立支援。ある程度人間らしい生活ができるようになり、安全が確保されると、経済的な自立が必要になる。職業訓練だけでなく、就職斡旋も行う。手に職をつけるだけでは意味がない。現地に必要とされている職で、訓練を行い、OJT からそのまま就職につなげることを目指している。南スーダンでは地域の就職率 7 割にまで高めた。

4 つ目、それでも根深く残る民族対立などの心のケア。これから共存していくんだよ、というのを理解する。表面的な和平合意だけでは、住民間にわだかまりが残る。

最終的に私たちは外部の人間で、いつかなくなる存在。初日から、現地の人ができることは全部やってもらう。骨をうずめるという覚悟でやるのはひとつのやり方だけど、現地で暴動とかがあつたら逃げ帰れる国があるのに、できないことを約束すると、紛争で傷ついた人が裏切られたと思ってまた傷ついてしまう。時にはこのスタンスは、現地の人から非難されることもある。自分たちは被災者なのに労働しろとか、鬼か、とか言われるけど、2,3 週間して再び行くと、きちんと働いている。被害者は、ものや家族だけでなく尊厳もうしなってしまう。現地の人が出来ることまで外の人がやってしまうと、自立の芽を摘む。待っていれば誰かがなんとかしてくれるだろうと思わせたらだめ。最初は陰悪になっても、プロジェクトがおわって半年後くらいに、あの人たちが来てくれてよかったと思わせるこ

とが理想。

活動紹介。避難民女性の家庭内暴力や性的被害のカウンセリングができる人材育成。紛争解決の人材育成。育成したコミュニティカウンセラーが現地のリーダーになっている。友達との謝罪の場を設定してほしい、というような相談を受けるほど、地域の信頼醸成に貢献するように。

また、カウンセラーは、地域の中で、子供にとって憧れの大人のような存在になっている。これは非常に重要な意味を持つ。紛争後の地域では悪いロールモデルはたくさんいる。そこから暴力的な子供が育つ負のサイクルがある。いいロールモデルを育成することができる。日本のプロフェッショナルを送るよりも、いいサイクルが回りやすい。日本人が表に出なくてもいいところはできる限り現地の人に。自分たちのコミュニティを自分たちで立て直している、という意識を持ってもらう。

現地で信頼醸成や和解のプロジェクトを行う際には、和解という言葉を使わないようにしている。和解、という言葉で来る人たちは、既に和解する気があるので、和解プロジェクトは不要。必要なのは、和解とかとんでもないというひと。そういう人を集めるために、民族を超えて興味のある事項、たとえばこのケースでは町の掃除、集まったゴミの資源化を目的とした。民族を混ぜたチームわけをして活動を行ってもらう。作戦会議をする中で自然と協力し合う。現地で、あえて和解という言葉を使わずに、最終的に目標が達成されるようにする、という手法をよく使う。

町の掃除なんかしないという若者を取り組むために、スポーツや音楽イベントから取り込む、というように何層にも分けて取り込む。現地の人を巻き込んでいくことで、自分たちでどうすればいいのか考えられるようになる。育成した若者たちが、違うスラムに指導員としていく、自分たちがいなくても回る、人材育成の仕組みをつくる。

## ● 選択肢の使用期限を逃さず、やりたい仕事に向けて行動をとる

キャリアキャリアした話をするのは好きじゃないが、人生の岐路にたったとき、意識しているのは、選択肢と行動。

ルワンダの写真で気づいたこと。自分の手の中にある選択肢。

写真を見たとき、バブル経済がはじけ、消費税が上がり、政治家が汚職で逮捕されるというような社会情勢。家庭も貧しく、ふてくされていた時期。その時にルワンダの写真を見て、自分は不満は言っているけど、努力さえすれば自分の選択肢を切り開ける。でも、あの写真の親子は、いきたいと思っても生きることすら選べない。自分の手の中の選択肢は、世の中の日とすべてが持っているわけではない。自分が持っている選択肢を意識して生きてきた。

でも、一つ一つの選択肢にも使用期限がある。今皆さんの目の前にある進路の選択肢が5年後もあるか。小学5年生の段階でも失われている選択肢がある。意識しない中で失効し

ている選択肢はたくさんある。この選択肢を失ったら3年後、5年後に後悔しないか、50歳、60歳になってもやり直しができそうな選択肢は後回しにする。ITブームとか、あのとき起業してれば、という人がたくさんいる。ここで大事なのが行動。今こういう仕事をしているというのは日本では特殊なので、どうしてそういう仕事ができているか、といういろいろな人に聞かれる。でも自分は優秀なわけではなく、行動をとったというだけ。

人生において、究極の選択は3回か4回だけ。1回目は高校のとき、2回目は国連を辞めてアフガニスタンに行くかどうか、3回目は国連を辞めてJCCPをやるかどうか。他の人がもてない選択肢はどれだろうか、今しかできないことはどれだろうか、ということ重視してきた。26歳のとき、シエラレオネで働いていて、国連でいいポストもあったけど、日本からオファーがあった。外務省に対してもいいイメージがなく、アフガニスタンというとアメリカのいいなりで、自分で動けなさそうだった。でも、試験なしで外交官になれる。こんなルートを選ぶ人はいなさそうだった。外務省のことはそれまでなにも知らなかった。知らないことをやったほうがキャリアは広がるのではないかと考えた。想定外のことが来たときは、チャンスだと思う。人がその機会を選んだら悔しいと思うか、も重視している。

## ● チャンスを見つける、視点の転換

教育機関からグローバル化について講演してほしい、評議会に入ってほしいという依頼がきたりするが、グローバル化がなんなのか、というのはイメージしづらい。

今日本のGDPは3位だが、2050には8位だと予測されている。日本の前にインドネシアがいて、日本の3つ後にナイジェリアがいたりする。というと日本の地位の低下を悲観する人もいるが、逆に考えると、ナイジェリアのように今様々な問題を抱えた国がこの程度のポテンシャルがあると世界的に思われている。一途上国が、ここまでするために現地が必要となる職業は何か。と考えると、チャンスはいくらでもある。

今日本でSEはすごくブラックな職種。SE8年くらいやっている知り合いが辞めるというから、ソマリアにつれて行ってデータベースを作ってもらった。その人が言うには、「国際協力には興味があったけど、自分には貢献できるスキルはないと思っていた。」日本では当たり前前のスキルなのに、国連からは専門家として重宝される。専門にすべきは、自分が好きなもの、得意なもの。努力を努力だと思わず、楽しく掘り下げていけるものを大事にしてほしい。

グローバル人材ってなに、ときかされると、ボーダレスな人間だと思う。国境だけでなく、役職や肩書きと関係なく活躍できる人。どこでもこの人だったらできると思わせる人。スキルやツールとなるべき語学力、柔軟性。これらは国際協力の分野だけでなく、どこでも必要になる。企業とか国連とかNGOとかの垣根がどんどんなくなってきている。

質疑応答：

**Q** 難民などへの人道支援を NGO が行っているが、どのように貢献しているか。最も意義のあることはなにか？

**A** 経済的な目的と人道的な目的。

何千人も何万人も、支援されなければ生きていけない。存在自体が社会的なコスト。本当は社会の生産側に回るはずなのに、一時的ないしは半永久的に消費側におかれている。一刻も早く本来の役割を果たせるようにすることが、その国や地域にとって重要。

でも一番の目的は人道的なもの。難民のままでいることは、いわゆる弱者として固定化されてしまうということ。被害者が被害者であり続ける仕組み。その子供の代まで、ずっとその立場でいつづけなければならない。加害者側に回ったほうが得、自分たちが被害者にならない方がいいという価値観が植えつけられてしまう。そういった負のサイクルをできる限り早く絶ち、自分の人生を切り開けるようにする。そういう人たちが社会復帰できないようなゆがんだ社会は、平和で安定した状態にはなり得ない。しかも被害者のほうが圧倒的に多く発生する。そういう構造が解決されることが人道支援の役割。

**Q** 平和解決において、武力はどのくらいひつようか。たとえばボコハラムの指導者は死刑にすべきか？

**A** 平和をつくるために、一定の武力は必要だと思う。最終段階と、抑止力。PKO はまさに国連の運磁力を抑止力とした和平。でも、一時的な措置。その間に政治的なプロセスを進めなければならない。何回も使えるものではない。話し合いだけでは解決できないときに、使うことのできるもの。

死刑制度について。死刑制度の問題というより、ボコハラムや地域の問題。

死刑反対の団体もあるが、その地域の文化とか国民感情にあわせた措置をとることが重要。最終的な目的はその地域を平和にすること。その地域の人たちがそうでなければ納まらないのであれば死刑もあり。例えば、ソマリアでは、警察が機能していないので部族長が話し合って決める。ラクダ 100 頭とか。はたからみて理解できなくても、その地域の人にとって納得できればよい。外部から改定し、欧米式の裁判の仕組みをとりいれたりすると、結局認められない結果となり、よからぬことが起こる。平和のためにはある程度正義を妥協しなければいけない部分もある。武装勢力を和平交渉に参加させるために、戦争犯罪をなしにするとか。

**Q** プレデターやリーパーなど無人爆撃機が増えているが、今後戦争はどう変わっていくと思うか？

**A** テレビゲームのように戦争を遂行できるようになってきた。武力がある国が手を汚さずにできる、不均衡な状態。無人機の使用はどんどん拡大していこう。

戦争はどんどん変わってきている。国と国との戦いだったものが、国内での内戦であったり、テロであったり。テロは1人が移動すれば脅威はそれに合わせて移動する。安全圏だと思っていたところにも脅威が来うる。一般の犯罪と紛争の違いがわからなくなる形で紛争が拡大している。加害者もそうだし、被害者もどんどん拡大。どこにいても被害者になりうる。観光にいても。内戦とか紛争が、どこか離れた国の問題ではなく、自分たちの社会にも関係のあるものになる。平和のための取り組みもまたボーダレスになりうる。

**Q** 国連に入る際はどのようにはいったのか。

24歳のときに国連ボランティアとしてシエラレオネのPKOに勤務。普通25歳以上でないと思募できないが、大学院を出て、ルワンダで働いていたときに、シエラレオネに自分のお金でいった。そのときの経験を本に書いて、お世話になった研究者に載せてくれと頼み、それを見た人からオファーが来た。

アフガニスタンに2年勤めたあと国連に戻ってコートジボワールに行ったときには、シエラレオネで一緒に働いていた人から声がかかった。人材ありきで採用されることが多い。紛争地ではとにかくすぐ成果が求められる。あの人がここにいたらこんなことができる、ということで声をかけられることが多い。そのつどそのつど成果を挙げるのが大事。

**Q** 現場重視から日本に拠点を置くようになったきっかけは？

30歳で国連を辞めた。日本の中で紛争解決をする人材を育てたい。日本でできることがたくさんある、と現場で感じるが多かった。どうやって原爆から復興したのか、経済成長したのか。日本は人材の層が薄くて、NGOも育たないと国連の同僚に愚痴っていたとき、外野席から愚痴っているだけだと気づいた。

自分の数少ないとりえのひとつは、得手不得手をよくわかっていること。ひとがやらないことをやる。途上国や紛争地に、中国だと警戒される。日本の企業だったら一緒にやりたいといわれる。相談を受けることがずっと続いていた。だれもやりそうになかったので、自分がやった。

自分の存在意義を考え、他の人がやってくれることは他の人に任せ、自分が問題の存在に気づき、解決できそうだったら自分がやる、というスタンス。武装解除を専門にしたときと同じロジックで意思決定している。

**Q** 今持っている専門のスキルをどの時点で得てきたのか。大学院では専門家がいなかったということだが、どういったプロセスで今もっているスキルを得てきたのか。知識と現場のリンク。

体系的に物事を見る、文章にするということは練習できた。

武装解除の現場ではたらけることになっても、これがそのスキルだとかっさりしたノウハウはない。1年に1回とか、自分に何ができるようになったかを振り返る機会を持って



いる。得られたスキルの棚卸し。

一番自分のスキルが形になるのは、誰かに教えるとき。自分もずっと武装解除をやってきたが、ガーナで講義をしてくれといわれて、はじめて体系的に資料をつくったりして、自分の技術を分類できた。

現場での研修は講演というより、参加型。抗議を受ける人からの質問や意見から、どんどん自分の経験が形になっていく。

依頼を受けるたびにそれをまとめ、そこで自分のできることに気づく。そのたびに自分の教えられる範囲が広がり、それをまた人に伝えることで、

自分の中で人に伝えられるものってなんだろうな、というのを、教える機会がなくても自分でやってみる、というのをお勧めする。